

4. 水の流れと自然メッセージ



千代川



千代川

概要

千代川は、岡山県境に近い智頭町駒帰の東方沖ノ山（1318.8m）を源流とする、流域面積1,190平方キロメートル、幹川流路延長52キロメートルの県東部を北流する一級河川です。

智頭町・鳥取市用瀬町・鳥取市河原町を貫流し、土師川・佐治川・曳田川・八東川・野坂川・袋川を合流して賀露港に注いでいます。鳥取市円通寺で鳥取平野に達し、平野では自然流として幾度も流路を変えた暴れ川でした。昭和2年には八千代橋から賀露港まで水路をつけかえ、堤防が完備されました。

成り立ち

地球が自然環境を形成していった200万年という時間の流れの中で、海進・海退を繰り返しながら、千代川は中国山地の山々の肌をけずり取り、谷を刻み、運んだ土砂を河口近くにためて、鳥取平野という沖積平野を生成していきました。

山間の谷筋を流れ下ってきた千代川は、鳥取平野で縦横にその流れを変えて上流から下流へと土砂を運びながら、その流れを洪水のたびごとに変化させてきました。

底湿の沖積平野のほとんどの場所は人の生活できる場所ではなく、原始のままに川筋を変え、氾濫する千代川の沖積地は、アシの生い茂る湿原であったと考えられています。

こうした低湿地が水田に開拓されて整えられていくのは、16世紀（江戸時代初期）以降になります。それらの開拓と治水の歴史は、現在でも千代川の川筋に追うことができます。



千代川と二伝承



①千代川の名称由来 ②「千体」にまつわる伝説

①千代川の名称由来

川名は戦国時代末期から江戸時代初期には「仙大川」（寛永22年『山県長茂覚書』吉川家文書）、『陰徳太平記』には「千谷川」と記され、一国数郡の谷々の流れがみなこの川に流れかわることから付けられた名で「せんたに」と唱えるのを文字に受けて「せんだい」と書かれたという説や、地元民が「せむだい」とよんだことから「千代」の字があてられるようになったという説があり、その他にも「泉台」や「千体」といった説があります。

②「千体」にまつわる伝説

弘法大師が上流の山にある千の谷に一体ずつ仏像を安置しようと千躰の仏像を刻んでいたところ、999谷しかなかったために、仏像を全て川に流したという伝説や、三面鬼という山賊を退治の際に、薬師如来の像を千体に刻んで成敗の成就を祈願し、願いが叶ったという伝説があります。



袋川



概要

千代川水系の1級河川。同水系では八東川に次いで2番目に長く、流長28.4kmあります。兵庫県境にそびえる扇ノ山に源を発し、県下最大を誇る雨滝地区の高さ約40mの雨滝から西流して木原・下木原地区で流れを南に向け、栃本地区で大石川を合流し、楠城・拾石と流れ、殿地区で神護川を、下流の源門寺地区で上地川をそれぞれ合流します。

松尾地区で北西に大きく流れを変えて新井・山根・神垣・谷・玉鉾・麻生を通過し、南流してきた美歎川と合流したのち、宮下地区や面影山の北、東今在家・大杵の地区を通り抜けます。



4. 水の流れと自然メッセージ

袋川からのメッセージ

(袋川の名称由来と名称変更)

『鳥府志』によると、

「鳥取の山下にありたる沼沢を埋地となさんとて、川脉を此方へ切込みたる時、数町の間いづれを川脉と云ふことも無く、広き処を流通りしゆへ、袋川の名称は是より起りたる歟。されば今の御城下のあたりにて呼たる名ならん歟と臆察せらるる也」

とあるように、屈曲の激しい蛇行河川であることから名付けられたといわれています。

特に袋川下流部一帯は軟弱地盤のため浸食が甚だしく、流路の蛇行は千代川水系で最も激しいものでした。

(『鳥府志(ちょうふし)』とは：文政12年(1829)に鳥取藩士・岡嶋正義(1784~1859)が著した鳥取の地誌。)

昭和9年、大杵の大杵橋から西進して吉成・古市を通り、千代橋の袂で千代川に注ぐ放水路が完成したため、新河道を「袋川」と呼ぶようになり、大杵を北流し、市街地をうねるように流れて浜坂で千代川と合流する旧河道を「旧袋川」と呼称しましたが、平成18年4月より名称が改められ、新河道が「新袋川」、旧河道が「袋川」へと変更されました。



4. 水の流れと自然メッセージ

袋川からのメッセージ

(袋川の源流を訪ねて)

扇ノ山に源を発する袋川。その袋川の源流に建てられた碑は、雨風に晒され朽ち果てた状態でした。そこで新たな碑を建立することが決まり、平成17年10月11日、小学生21名を含む総勢38名の『袋川源流探検隊』が、扇ノ山の中国自然歩道“河合谷登山道コース”から入山し、源流を目指しました。40分ほど歩くとブナの林に囲まれた自然豊かな所に「袋川源流の碑」を発見。9年前に建てた時にはここから水が湧き出ていたそうですが、驚いたことに、この年は夏の降水量が少なかったせい、水は湧き出していませんでしたが、袋川の河原で拾った石に参加者が思い思いのメッセージを書いて、水の恵みと豊かな自然、世界の平和などの願いを込めて再建立した「袋川源流の碑」の根元に埋め、袋川への思いを新たにしました。



袋川名称由来と袋川・九呼称



4. 水の流れと自然メッセージ

袋川名称由来と袋川・九呼称

- ・ 雨滝川・・・雨滝より国府町谷までの、現在の袋川上流は雨滝川と呼ばれている。
- ・ 国府川・・・雨滝川より下流で天神川と合流する矢津（現・立川町）辺りまでの、現在の袋川中流部分の別称。因幡川ともいう。明治の始め頃開校した宮ノ下小学校校歌に見られる。
- ・ 因幡川・・・天神川と合流する矢津（現・立川町）の辺りまでの別称。国府川ともいう。平安時代の歌人・藤原兼輔の和歌や『因幡誌』に見られる。
- ・ 袋川・・・因幡川より下流部分のことを昔は袋川と呼んでいた。明治時代に行政名として指定されて以降は、全川を袋川と呼んでいる。
- ・ 新袋川・・・昭和9年に完成した、大杵から西進して千代川に注ぐ放水路。平成18年より新袋川と名称が変わった。
- ・ 城川・・・鳥取城の堀をなす川として城下付近を呼んでいた。
- ・ 法美川・・・源流から大杵地区あたりまで、法美郡を流れることによる別称。『時範記』（因幡国守平時範の日記。承德3年（1099）2月26日のくだりに「次至于法美川乗船参三嶋社（法美川から船に乗り三嶋社へ参る）」とある。）
- ・ 湊川・・・『太閤記』（賀露の湊から鳥取城に舟運の使いをもたらす唯一の水路）。
- ・ とっとり川・・・『信長公記』（織田信長の一代記。著者は信長の家臣・太田牛一）



雨滝四十八滝物語



雨滝 四十八滝物語

雨滝四十八滝とは、那智の四十八滝や、いろは四十八文字にたとえて言ったもので、四十八は滝の数ではなく、次に説明する滝もふくめての総称であり、数が多いという事を言葉に表わした呼び名です。

雨滝は幅4m、高さ40mという鳥取県随一の飛瀑を誇り、扇ノ山溶岩がつくる河合谷高原の北西縁部であって、溶岩流の末端部にあたります。

溶岩は黒ずんだ安山岩（両輝石安山岩）の冷却に伴って規則的な柱状の割目（柱状節理）を生じた岸壁よりなった特異な景観を呈し、トチ、ブナなどの千古の原生林に包まれた滝です。昭和60年に鳥取県が選定した「因伯の名水」の指定を受け、また、断崖絶壁を轟音とともに落水する壮観な威容から、平成2年には「日本の滝百選」にも選ばれています。

古来より有数の霊場として善男善女の修行の場、お遍路さんの信仰の場として活用され、今なお神秘的な霊境としての雰囲気を残しています。滝の下には石造りの不動明王が安置されています。



4. 水の流れと自然メッセージ

雨滝四十八滝物語

- ①布引き滝、②筥滝、③樋滝、④平滝、⑤比丘尼滝、⑥夫婦滝、⑦親子滝
⑧馬淵滝、⑨一番滝、⑩二番滝、⑪菖蒲谷滝

①布引き滝

純白の絹糸を懸け流したような美しさからその名がつけました。山の中腹より湧き出る地下水のため、長期の日照りに豪雨にも水量が変わることはなく、清流が絶えることはありません。雄大で男性的な雨滝と女性的な布引の滝は好対照になります。

延宝年間(1673～1681年)には、専誉上人が神拝設定した因幡西国三十三ヶ所の二十番札所がこの地に置かれていました。

「観音の 誓いあらたにましまさば 奈加礼もたえぬ 布引の滝」と御詠歌が詠まれています。なお、一番札所は鳥取市長谷の長谷寺、十八番は谷村峰の観音円城寺、十九番は殿村の観音堂です。



② 筥滝

雨滝の前にかかる桂橋を渡り、鉄板の階段を登って、トチ、ケヤキ、ブナなどの原始林の中を800mほど進んだところにある三段の滝です。

扇ノ山、河合谷高原を源とした冷水が流れてきます。縦横3m、深さ1mばかりの岩の重箱に清流が溢れ、その水が流れて下の重箱に落ち、また溢れて下の重箱を満しています。こうした数段の重箱が谷の斜面に並んで一つの滝をつくっており、大滝の雄大さとは異なって神秘的な感じがします。

また、滝壺にまつわる哀れな亀の伝説があります。



雨滝四十八滝物語

③樋滝

雨滝をさらに上流に登った奥、親子滝から200m位進んだところにあります。にあります。山の岩盤が急な流れに掘られた様子が樋のように見える、三段になった急流で、目を見張るばかりの見事な滝です。高さ30mほどの滝で、岩の隙間から白い飛沫をあげて落下する、勢いのある滝です。

④平滝

樋滝の上にある大きな滝です。

⑤比丘尼滝

樋滝の手前を右に別れた谷にあり、水量は少ないが、高さのある見事な滝です。小屋尾道(雨滝の右の山の尾根道)を進むと左手に見る事ができます。比丘尼とは何か伝説がありそうな気もする滝です。

⑥夫婦滝

雨滝と樋滝の中間にあります。雨滝から中国自然歩道を登いくと、道の左手に二つ並んだ高さ10mほどの滝があります。これは大正10年、岩田知事が踏査した時に、岩田知事の質問に対して部落の案内役をした伍長の岸本富蔵氏と北村幾太郎氏の二人が即座に名付けて答えた滝の名であるといわれています。



雨滝四十八滝物語

⑦親子滝

夫婦滝のすぐ上にある、高さ7mほどの大と小の滝です。これも夫婦滝と同様、大正10年に岩田知事が踏査した際に、岸本富蔵氏と北村幾太郎氏の二人が即座に名付けて答えた滝の名であると言われていています。

⑧馬淵滝

筥滝の奥、河合谷高原の下にあります。河合谷長者(鳥越長者ともいう)の息子が乗りまわしていた愛馬が落ちたので、馬淵と名付けられました。この滝の上のあたりに、自然のものなのか、または河合谷長者が造ったものなのかは定かではありませんが、川底一面に不思議な石畳があります。

⑨一番滝

二番滝、菖蒲谷滝とともに、雨滝の右、仏谷の奥にあります。水量が少なく、目立たない滝です。

⑩二番滝

一番滝、菖蒲谷滝とともに、雨滝の右、仏谷の奥にあります。水量が少なく、目立たない滝です。

⑪菖蒲谷滝

一番滝、二番滝とともに、雨滝の右、仏谷の奥にあります。水量が少なく、目立たない滝です。



古書に見る雨滝 『稲葉民談記』 と 『因幡誌』



4. 水の流れと自然メッセージ

古書に見る雨滝『稲葉民談記』と『因幡誌』

『稲葉民談記』

「雨滝、妙見大明神。タキナミ間アリ。前ニカツラギノ木アリ、廻り十三カ、へ有。布引タキ、箱ダキ大魔処ナリ。仏谷ト云有。村ノオクヨリ但馬海上ニ出ル」

* 「タキナミ間」…たきつぼ

* 「カツラギ」…桂の木

* 「十三カ、へ」…大人13人が手をつないで計った長さ、約20m

* 「大魔処」…ものすごく険しいところ

（『稲葉民談記』とは：

江戸時代、小泉友賢(ゆうけん) (1622～1691) によって書かれた鳥取の地誌。貞享5年(1688)頃完成したといわれています。寛永9年(1632)のお国替えにより備前国から移住し、藩医を辞職した後に約20年かけて因幡国中の名勝旧蹟等を訪ね、また各土地の古老から口碑・伝説を聞いてまわり、記録したものです。)

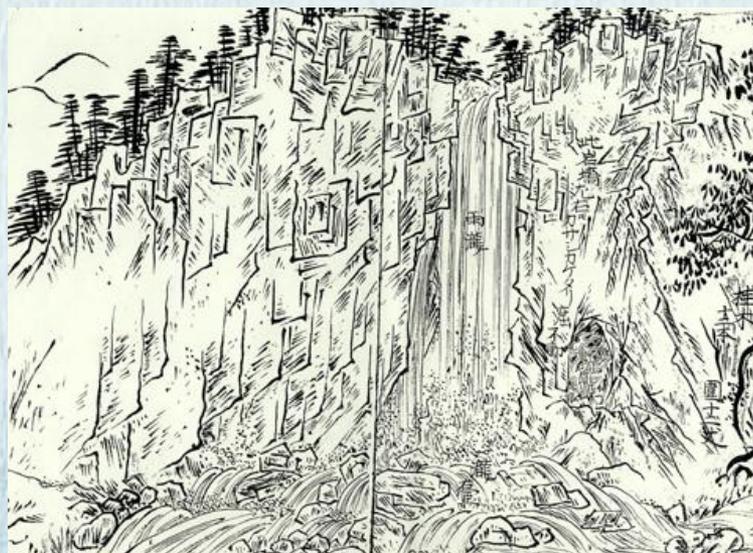


4. 水の流れと自然メッセージ

古書に見る雨滝『稲葉民談記』と『因幡誌』

『因幡誌』

「村より東に當りて谷奥十五町許りにあり。其地絶岩聳え谿谷幽にして四時蒼翠たり。ばく布は南向にしてたかさ十二丈余なり。飛泉雲を穿ちて上天より下りきたるが水響殷々山鳴り谷応ふ。奇絶言はん方なし。以て慮山の銀河三千丈の壯觀にも比すべきか（中略）たきの右方、石壁に不動の像を彫刻せり。直下に桂の老樹あり一株十二本に分れたり。周囲五丈余うっそうとして一大森林の觀あり。幾ばくの星霜を経てここに至れるや（中略）またその北側に一瀑水あり（中略）布引瀑という。風景また佳なり…」



『因幡誌』の雨滝図



4. 水の流れと自然メッセージ

古書に見る雨滝『稲葉民談記』と『因幡誌』

（『因幡誌』とは：

藩医・安倍惟親（これちか）（1734～1808）によって民談記の体制がさらに整えられ、詳密に書かれた鳥取の地誌。寛政7年（1795）頃完成。『稲葉民談記』から百年間の史誌の変遷とともに、異説があれば自ら古文書を改め、現地を踏査して考証への正確を期して書かれているといわれています。）

・雨滝の由来

『因幡誌』では、「飛溜沛然（はいぜん）として四方に乱れ散る勢ひ、さながら暴雨のそそぐが如く空翠常に人衣を濕（うるお）せり。昔は如何許りにや有けん。あめ滝と名づけしも其故なるべし。」と書かれており、季節を問わずに常に豊富な水量で、雨のように勢いよく飛沫を上げて落ちてくることに由来するようです。



雨滝 伝説



雨滝 伝説

- ① だいじょうごんの坂<雨滝>
- ② 雨滝の伊平の知恵<宇倍神社>
- ③ 亀が淵伝説<筥滝>
- ④ シラジラババアのたたり伝説<七曲り城址>
- ⑤ 羽柴秀吉の貂の皮淵伝説<雨滝川>
- ⑥ 桜田門の扉に使われた大柵の木伝説<雨滝の木材>
- ⑦ 蛇(じゃ)山(やま)城の伝説<雨滝の愛宕山>

① だいじょうごんの坂<雨滝>

雨滝集落から雨滝に行く途中にある急な坂道のことを、地元では「だいじょうごんの坂」と呼んでいます。「だいじょうごん」とは暦の吉凶を司る八神の大將軍のことで、太白(たいはく)(金星)の精であり、この神の方向は3年塞がるとされて忌み嫌われていたため、暦学の方位と急な坂道の地形を重ねて、この坂より先への立ち入りを避けていました。

② 雨滝の伊平の知恵<宇倍神社>

ある日、若殿が領地を検分するので、物知りによく知恵のまわる雨滝村の伊平という老人が案内役に選ばれました。宇倍神社の前に来たとき、茶目気の多い殿様がこの寺の名前を尋ねると、伊平は“一宮山・長命寺”と答えました。さらに次々と絶妙に答える伊平の博学に殿様は感心し、引出物を下されました。



③亀が淵伝説<筥滝>

雨滝村に亀という心の優しい男の子がいました。両親を早くに亡くし、心の悪い義理父に何一つ不平を言わずに働いていましたが、ある年の春、二人が淵の横の山で薪を伐っていたところ、亀が鉈を取り落とし、雪解け水で水かさが増した下の淵に沈んでしまいました。義理父に鉈を拾ってくるように命じられた亀は淵に入りましたが、それきり上がってくることはなく、この滝壺のそばに来ると亀の悲しげな声が聞こえるようになりました。

④シラジラババアのたたり伝説<七曲り城址>

雨滝に向かって左の陰阻な山を城坂山といい、この山上に七曲り城がありました。羽柴秀吉が天正8年(1580)11月にこの城を攻め、寒気と食糧不足のため力尽きた武将以下全員が28日に自決しました。その時の城主の年老いた母親が怨霊となって、毎年11月28日には大嵐や大吹雪を起こしたり、山人に大きな石を転がして害を加えるなどの事故があったため、この日は天気が良くても山の近くに出掛ける者はなく、この怨霊を「シラジラババア」といって恐れていました。

⑤羽柴秀吉の貂の皮淵伝説<雨滝川>

羽柴秀吉が七曲り城攻めを目前にして、雨滝川(袋川)中の大きくて平らな岩上で休憩していたとき、秘蔵の貂の皮袋に入れた南蛮渡来の香を取り出そうとして、深い淵の中に落としてしまいました。その後何年もこの淵の上を通ると良い香りがし、この淵を貂の皮淵と呼ぶようになりました。



雨滝 伝説

⑥桜田門の扉に使われた大栃の木伝説<雨滝の木材>

雨滝の深山は原始林のように栃やブナ、桜、朴などの大木が茂り、その中でも一段と大きな栃の木がありました。城普請の際に直径が4m以上あったといわれるこの木が切り出され、大雨の時に雨滝川（袋川）を流して城に運びましたが、城普請には使わず、江戸城の内桜田門（桔梗の門）の扉に使われたということです。

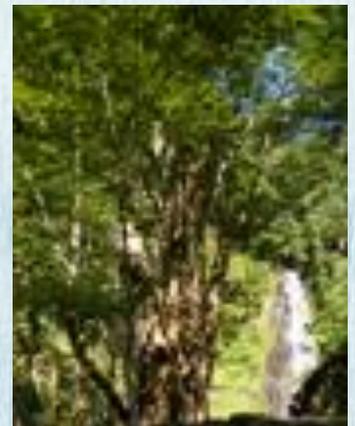
⑦蛇(じゃ)山城の伝説<雨滝の愛宕山>

雨滝の愛宕神社が鎮座する山には戦国時代に山崎の毛利氏の出城があり、山の名を蛇山といたので蛇山城と呼ばれました。城は南東に面して建っていたらしく、下の田んぼの名を浄禅（城前）、山すその道を浄禅山川（ほおき）、道の下を流れている川を山川（ホーキ）、山川と対照して広い田んぼの中に走る真っ直ぐな道を躡（なわて）といいました。

[雨滝前のカツラ]

雨滝の滝壺より50mほど手前の左手に、桂の老木があります。江戸時代の記録によれば、幹の周囲が20メートルあり、日本の名木320本のうちに数えられていました。樹齢数百年の老桂樹（かつら）には神霊が宿るとされ、長寿にあやかるように多くの人がお祈りをしたということです。しかし、いつの頃か、落雷により幹が空洞化して、根本から生えた数本が現存しています。

また、鳥取藩士で歌人でもある小林大茂によって、「いつの世に この桂の種生えて 雨の大滝 風かおるらん」という歌が詠まれています。



扇の山周辺の渓谷

[小又川渓谷]

標高1,000mの上山高原は扇ノ山火山の溶岩台地です。台地上にはスコリア丘があります。自然散策の高原として好まれています。

①シワガラの滝

[霧ヶ滝渓谷]

①霧ヶ滝

扇ノ山北部の上山高原末端部の滝です。標高750mに位置する高さ約60mの滝で下部の角礫岩層を覆うように谷を流れた厚さ20mの扇ノ山安山岩上の小谷から落下します。流れ落ちた水は霧となって落下し滝壺はありません。



霧が滝（湯村温泉観光協会HP）



国府町の二湧水



国府町の二湧水

①七宝水

②清水

①七宝水

稲葉山の中復からわき出ている湧水。伝承によると、霊験あらたかな水で、病人などに大変御利益があるといわれています。また宇倍神社の手水鉢(ちょうずばち)のお清め水にも用いられています。

稲葉山に七宝神社という神社があり、七宝水という名はその神社の名前によっています。稲葉山には古くから但馬に行く山道があり、旅人たちはこの水でのどを潤していたことでしょう。

②清水

「清水」と書いて「すんず」と読みます。
地名「清水」のいわれとなった清水集落の山裾からわく清水。古くは「澄水」と書いたようで「すみみず」―「すみず」―「すんず」と言い方が変化し、「澄水」が「清水」に変わったといわれています。



鳥取周辺の六温泉



4. 水の流れと自然メッセージ

鳥取周辺の六温泉

- ① **鳥取温泉**（鳥取市）
- ② **吉岡温泉**（鳥取市）
- ③ **鹿野温泉**（鳥取市）
- ④ 浜村温泉（鳥取市）
- ⑤ 岩井温泉（岩美町）
- ⑥ **湯村温泉**（新温泉町）

（いなば温泉郷）

鳥取県東部に位置する「いなば温泉郷」には、鳥取温泉・吉岡温泉・鹿野温泉・浜村温泉（鳥取市）、岩井温泉（岩美町）があります。海岸型・グリーンタフ型の温泉と位置づけられています。これら5つの温泉のうち、鳥取温泉・吉岡温泉が鳥取砂丘エリア内の温泉です。



鳥取周辺の六温泉

① 鳥取温泉（鳥取市）

鳥取駅から徒歩5分の市街地に源泉をもつ温泉です。開湯は明治37年で、湯量豊富な温泉はナトリウムを多く含み、透明です。繁華街の中にある温泉として珍重されています。深度50m位の深さで揚湯しており、河原火砕岩の割れ目から流出しています。

県庁所在地に温泉の湧く例は全国的にも珍しいといわれています。

② 吉岡温泉（鳥取市）

鳥取市内からほど近い、湖山池のほとりにある温泉地です。14世紀には発見されたと伝えられる温泉で、江戸時代には鳥取藩主の浴場が設けられるなど、湯治場として栄えました。鳥取花崗岩の割れ目から流出しています。

伝説によると、今から約一〇〇〇年前、芦岡長者の娘の顔に腫物ができて悲しんでいると、ある夜夢の中に薬師如来が現れて、ヤナギの下に霊泉があると教えたのが始まりと伝えられています。



鳥取周辺の六温泉

③ 鹿野温泉（鳥取市）

1954年に開発され、鳥取花崗岩の割れ目から流出しています。

閑静な城下町は戦国時代の武将・山中鹿之助や鹿野城主・亀井茲矩ゆかりの地です。単純泉で、温泉温度は50～70度。

④ 浜村温泉（鳥取市）

山陰本線を挟んで北を浜村温泉、南を勝見温泉といい、この両方を総称して浜村温泉とよんでいます。

勝見温泉の開湯は文亀元年（一五〇一）といわれ、昔は鷺の湯とよばれていました。一方、山陰本線を隔てて北の浜村温泉は、明治になって開発されたもので、なだらかなスロープを描く砂丘の一角に湧く温泉であります。

貝がら節の発祥地で、豊富な湯量と500年の歴史。美しい白鷺が傷を癒したと伝えられます。



4. 水の流れと自然メッセージ

鳥取周辺の六温泉

⑤ 岩井温泉（岩美町）

平安時代に発見された因幡最古の温泉です。開湯1300年といわれ、「国民保養温泉地」に指定されています。

湯かむり唄を歌いながら柄杓で（ひしゃく）で頭に湯をかける奇習「湯かむり」が江戸時代から伝わり、今も保存会によって受け継がれています。温泉効果を上げるために、長湯をするよう考え出されたものだとか。先人が考え出した知恵です。

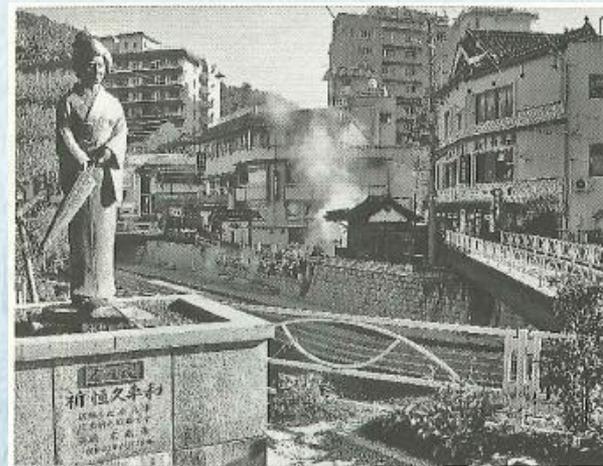
江戸時代には、近くで繁栄していた荒金・銀山などからの湯治客で賑わい、今も当時の面影が町並みに残ります。

⑥ 湯村温泉（新温泉町）

岸田川の支流春來川の清流をはさみ、国道9号線に沿った県境にある山峡の温泉で、東・西・南の三面に緑の山をめぐる療養向きの閑静な温泉である。

この温泉は、貞観二年（八六〇）、慈覚大師が発見したといわれる古い湯で、いまも湯槽からは荒湯の噴湯が湯煙をあげています。

花崗岩を切る湯村断層に起因する温泉と思われる。



湯村温泉



殿ダム



殿ダム

千代川流域の中心都市である鳥取市街地では、昔から何度も洪水による被害を受けており、その度に川の堤防を高くしたり、川の幅を広げたりする対策を講じてきました。また、雨不足の影響で日照りが続き、渇水被害にも幾度となく見舞われてきました。このような状況を受け、千代川・袋川の水を安全に流下させながら、増大する水利用に応えていくことを目的として殿ダムが完成しました。

昭和37年から鳥取県による予備調査に着手し、昭和43年に建設省(現・国土交通省)直轄事業として引き継いだ後、昭和60年に実施計画調査開始、平成3年に建設事業着手、平成12年からは本格的に付替道路工事に着手、平成19年にはダム本体工事に着手し、平成23年度に完成。

殿ダムはロックフィルダムとして高さ75m、総貯水容量12,400,000 m^3 、有効貯水容量11,200,000 m^3 で洪水調節、工業用水の供給水道水の安定供給、河川環境の保全、・水力発電の4つを目的としています。



流域の自然



4. 水の流れと自然メッセージ

流域の自然

〔菅野ミズゴケ湿原〕

標高400mにある高層湿原と周辺の山林からなるこの湿原には、オオミズゴケを中心に食虫植物のモウセンゴケ、カキツバタなどの湿原植物が群生しています。

なかでも、毎年5月から6月頃にカキツバタが深紫色の美しい花を咲かせ、日本海側の代表的湿原として昭和52年に県の天然記念物に指定されました。

〔キマダラルリツバメチョウ生息地〕

キマダラルリツバメチョウは、シジミチョウの一種で、羽根を広げた大きさは2cm前後になります。羽根の表面は黒または暗紫色で、裏面には黒と黄色のまだらの縞模様があります。幼虫期はアカマツの樹皮の下でアリとともに過ごし、さなぎになるとアリの巣の中で過ごすといわれ、飛び方に特徴があります。日本の固有種ですが、数が少なく生息地も限られているため国の天然記念物に指定され、鳥取市東町の長田神社、栗谷町の興禅寺、上町の樗谿公園の一带が生息地として特別保護地区に指定されています。

